

区分別科目名	呼吸器（気道確保に係るもの）関連			時間数の総計 10		
特定行為区分に含まれる特定行為に共通して学ぶべき事項	気道確保における呼吸器系の基礎知識 解剖と病態生理	1. 気道確保に関する局所解剖 2. 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整に関する病態生理 3. 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整に関するフィジカルアセスメント 4. 経口又は経鼻気管挿管の目的 5. 経口又は経鼻気管挿管の適応と禁忌 6. 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの種類と適応 7. 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブによる呼吸管理 8. バックバルブマスク（BVM）を用いた用手換気		講義	4.5	5
	気道確保の基礎知識			試験	0.5	
特定行為ごとに学ぶべき事項	特定行為： 経口用気管チューブ又は 経鼻用気管チューブの位置の調整	1. 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整の目的 2. 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整の適応と禁忌 3. 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整に伴うリスク（有害事象とその対策等） 4. 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整の手技	講義	4.5	5	
			試験	0.5		
			OSCE			
			実習	5症例		
担当指導者						
学習目標	気道確保の基礎を理解し、 特定行為を適切に行うための 知識・技術を身につける	気道確保における呼吸器系の基礎 知識解剖と病態生理	気道確保における呼吸器系の解剖と病態生理の知識を身につける			
		気道確保の基礎知識	気道確保の知識・技術の基礎を身につける、気管挿管の知識・技術の基礎を身につける			
		特定行為： 経口用気管チューブ又は 経鼻用気管チューブの 位置の調整	多様な臨床場面において、経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整の実施の可否判断、実施および報告の一連の流れを適切に行うための基礎的な知識・技術を身につける			
研修方法 研修場所	気道確保における呼吸器系の基礎知識 解剖と病態生理	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）			
	気道確保の基礎知識					
	特定行為： 経口用気管チューブ又は経鼻用 気管チューブの位置の調整	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）			
		講義（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	手順書の検討 1) 個人学習 2) 集合学習	場所：太田西ノ内病院		
			実技レクチャー 1) 個人学習 2) 集合学習	場所：太田西ノ内病院		
	実習	患者に対する実技 5 症例 手順書の再評価		場所：太田西ノ内病院		
評価方法	講義（放送授業）：単元ごとにE-ラーニング上で事後テストを行い、理解度を確認する 講義（面接授業）：講義中の観察評価、レポートの内容評価を行う 講義により、すべての学ぶべき事項を学習した後、科目最終試験（筆記試験）を行い、科目全体の理解度を確認する 「特定行為：経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整」では実技試験（OSCE）を行う					
	実習：レポート提出、評価表を用いた観察評価					

通番	学ぶべき事項	単元	学習内容	方法	時間数
1	1, 2	気道確保における呼吸器系の基礎知識 解剖と病態生理	呼吸器系の構造・機能 呼吸器系の診察・検査・画像 呼吸器系の症候・疾患	講義 (放送授業)	2.5
2	3, 4, 5, 6, 7, 8	気道確保の基礎知識	気道確保の目的・適応 気道確保の方法 気管挿管の目的・適応 気管挿管の方法 気管挿管時のフィジカルアセスメント	講義 (放送授業)	2
3	1, 2, 3, 4	特定行為： 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整	経口・経鼻気管チューブの位置調整の目的・適応と手技 経口・経鼻気管チューブの位置調整の判断 経口・経鼻気管チューブの位置調整に伴う有害事象とその対策	講義 (放送授業)	1.5
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートを記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			実技レクチャー ・個人学習：実技の手順動画を見直し、手技の流れを確認する ・集合学習：指導者より実技の手順やポイントについての説明を受ける。手順やポイントを踏まえて実践し、指導者より助言を受ける ・個人学習：事後課題として、自身の課題と、その解決に向けどのように取り組むかをワークシートに記載し提出する	講義 (面接授業)	1.5
4	科目最終試験		共通して学ぶべき事項（30分） 気道確保における呼吸器系の基礎知識 解剖と病態生理 気道確保の基礎知識 特定行為ごとに学ぶべき事項（30分） 特定行為：経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整	筆記試験 (対面またはE-ラーニング上での実施)	1
5	OSCE 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整			実技試験	
6	実習 経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整		患者に対する実技／経験は難易度に応じて 5 症例とする 手順書の再評価／ 5 症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
備考					

通番	学ぶべき 事項	単元	学習内容	方法	時間数
1	3, 4	人工呼吸療法における呼吸器系の基礎知識 解剖と病態生理	呼吸器系の構造・機能 呼吸器系の診察・検査・画像 呼吸器系の症候・疾患	講義 (放送授業)	3.5
2	1, 2, 5, 6, 7	人工呼吸療法の基礎知識	人工呼吸療法の目的・適応 人工呼吸器の構造 人工呼吸療法に関するフィジカルアセスメント 人工呼吸療法中に起こりうる有害事象とその対策	講義 (放送授業)	2
3	1, 2, 3, 4, 5	特定行為： 侵襲的陽圧換気の設定の変更	侵襲的陽圧換気療法の適応 侵襲的陽圧換気療法における酸素化と換気の評価 侵襲的陽圧換気の設定と変更方法 侵襲的陽圧換気療法におけるアラームへの対処	講義 (放送授業)	2.5
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートを記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			事例検討 ・個人学習：提示された侵襲的陽圧換気の設定の変更の事例について、ワークシートを記載し、指導者・受講者と共有する ・集合学習：グループディスカッションを行い、検討した内容や自身の課題とその課題の解決に向けて学習すべきことをワークシートに記載し、指導者に提出する	演習 (面接授業)	1.5
4	1, 2, 3, 4	特定行為： 人工呼吸器からの離脱	人工呼吸器からの離脱の目的・適応 人工呼吸器からの離脱の方法（自覚覚醒トライアルと自発呼吸トライアルの実施と評価）	講義 (放送授業)	2.5
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートを記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			事例検討 ・個人学習：提示された人工呼吸器からの離脱の調整の事例について、ワークシートを記載し、指導者・受講者と共有する ・集合学習：グループディスカッションを行い、検討した内容や自身の課題とその課題の解決に向けて学習すべきことをワークシートに記載し、指導者に提出する	演習 (面接授業)	1.5
5	科目最終試験	共通して学ぶべき事項（30分） 人工呼吸療法における呼吸器系の基礎知識 解剖と病態生理 人工呼吸療法の基礎知識 特定行為ごとに学ぶべき事項（30分×2） 特定行為：侵襲的陽圧換気の設定の変更口 特定行為：人工呼吸器からの離脱		筆記試験 (対面または E-ラーニング上での 実施)	1.5
6	実習	侵襲的陽圧換気の設定の変更	患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
7	実習	人工呼吸器からの離脱	患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
備考					

区分別科目名		動脈血液ガス分析関連		時間数の総計 16		
特定行為区分に含まれる 特定行為に共通して 学ぶべき事項	動脈穿刺法・動脈血液ガス分析の基礎知識	1. 動脈穿刺法に関する局所解剖 2. 動脈穿刺法に関するフィジカルアセスメント 3. 超音波検査による動脈と静脈の見分け方 4. 動脈血採取が必要となる検査 5. 動脈血液ガス分析が必要となる主要疾患とその病態	講義	4.5	5	
			試験	0.5		
特定行為ごとに 学ぶべき事項	特定行為： 直接動脈穿刺法による採血	1. 直接動脈穿刺法による採血の目的 2. 直接動脈穿刺法による採血の適応と禁忌 3. 穿刺部位と穿刺に伴うリスク（有害事象とその対策等） 4. 患者に適した穿刺部位の選択 5. 直接動脈穿刺法による採血の手技	講義	5	5.5	11
			試験	0.5		
			OSCE			
			実習	5症例		
	特定行為： 橈骨動脈ラインの確保	1. 動脈ラインの確保の目的 2. 動脈ラインの確保の適応と禁忌 3. 穿刺部位と穿刺及び留置に伴うリスク（有害事象とその対策等） 4. 患者に適した穿刺及び留置部位の選択 5. 橈骨動脈ラインの確保の手技	講義	5	5.5	
			試験	0.5		
			OSCE			
			実習	5症例		
担当指導者						
学習目標	動脈穿刺法・動脈血液ガス分析に関する基礎知識を理解し、特定行為を適切に行うための知識・技術を身につける	動脈穿刺法・動脈血液ガス分析の基礎知識	動脈穿刺法・動脈血液ガス分析の知識・技術の基礎を身につける			
		特定行為： 直接動脈穿刺法による採血	多様な臨床場面において、直接動脈穿刺法による採血の可否判断、実施および報告の一連の流れを適切に行うための基礎的な知識・技術を身につける			
		特定行為： 橈骨動脈ラインの確保	多様な臨床場面において、橈骨動脈ラインの確保の可否判断、実施および報告の一連の流れを適切に行うための基礎的な知識・技術を身につける			
研修方法 研修場所	動脈穿刺法・動脈血液ガス分析の基礎知識	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）			
	特定行為： 直接動脈穿刺法による採血 特定行為： 橈骨動脈ラインの確保	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）			
		講義（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	手順書の検討 1) 個人学習 2) 集合学習		場所：太田西ノ内病院	
			実技レクチャー 1) 個人学習 2) 集合学習		場所：太田西ノ内病院	
	実習	患者に対する実技 5 症例 手順書の再評価		場所：太田西ノ内病院		
評価方法	講義（放送授業）：单元ごとにE-ラーニング上で事後テストを行い、理解度を確認する 講義（面接授業）：講義中の観察評価、レポートの内容評価を行う 講義により、すべての学ぶべき事項を学習した後、科目最終試験（筆記試験）を行い、科目全体の理解度を確認する 「特定行為：直接動脈穿刺法による採血」および「特定行為：橈骨動脈ラインの確保」では実技試験（OSCE）を行う 実習：レポート提出、評価表を用いた観察評価					

通番	学ぶべき 事項	単元	学習内容	方法	時間数
1	1, 2, 3, 4, 5	動脈穿刺法・動脈血液ガス分析の基礎知識	動脈穿刺法に関する局所解剖 動脈穿刺法に関するフィジカルアセスメント 超音波検査による動脈と静脈の見分け方 動脈血採血が必要となる検査 動脈血液ガス分析が必要となる主要疾患とその病態	講義 (放送授業)	4.5
2	1, 2, 3, 4, 5	特定行為： 直接動脈穿刺法による採血	直接動脈穿刺法による採血の目的と適応 直接動脈穿刺法における穿刺部位の選択 直接動脈穿刺法における採血の手技 動脈穿刺に伴う有害事象とその対策	講義 (放送授業)	2
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートを記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			実技レクチャー ・個人学習：実技の手順動画を見直し、手技の流れを確認する ・集合学習：指導者より実技の手順やポイントについての説明を受ける。手順やポイントを踏まえて実践し、指導者より助言を受ける ・個人学習：事後課題として、自身の課題と、その解決に向けどどのように取り組むかをワークシートに記載し提出する	講義 (面接授業)	1.5
3	1, 2, 3, 4, 5	特定行為： 橈骨動脈ラインの確保	動脈ラインの目的と適応 動脈ラインの穿刺および留置部位の選択 橈骨動脈ライン確保の手技 動脈ラインの穿刺および留置に伴う有害事象とその対策	講義 (放送授業)	2
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートを記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			実技レクチャー ・個人学習：実技の手順動画を見直し、手技の流れを確認する ・集合学習：指導者より実技の手順やポイントについての説明を受ける。手順やポイントを踏まえて実践し、指導者より助言を受ける ・個人学習：事後課題として、自身の課題と、その解決に向けどどのように取り組むかをワークシートに記載し提出する	講義 (面接授業)	1.5
4	科目最終試験		共通して学ぶべき事項（30分） 動脈穿刺法・動脈血液ガス分析の基礎知識 特定行為ごとに学ぶべき事項（30分×2）□ 特定行為：直接動脈穿刺法による採血 特定行為：橈骨動脈ラインの確保	筆記試験 （対面または E-ラーニング上での 実施）	1.5
5	OSCE 直接動脈穿刺法による採血			実技試験	
6	OSCE 橈骨動脈ラインの確保			実技試験	
7	実習 直接動脈穿刺法による採血		患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
8	実習 橈骨動脈ラインの確保		患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
備考					

区分別科目名	栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連			時間数の総計 11.5		
特定行為区分に含まれる特定行為に共通して学ぶべき事項	栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識解剖と病態生理	1. 循環動態に関する局所解剖 2. 循環動態に関する主要症候 3. 脱水や低栄養状態に関する主要症候 4. 輸液療法の目的と種類 5. 病態に応じた輸液療法の適応と禁忌 6. 輸液時に必要な検査 7. 輸液療法の計画		講義	5.5	6
	栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識輸液療法			試験	0.5	
特定行為ごとに学ぶべき事項	特定行為： 脱水症状に対する輸液による補正	1. 脱水症状に関する局所解剖 2. 脱水症状の原因と病態生理 3. 脱水症状に関するフィジカルアセスメント 4. 脱水症状に関する検査 5. 脱水症状に対する輸液による補正に必要な輸液の種類と臨床薬理 6. 脱水症状に対する輸液による補正の適応と使用方法 7. 脱水症状に対する輸液による補正の副作用 8. 脱水症状に対する輸液による補正の判断基準（ペーパーシミュレーションを含む） 9. 脱水症状の程度の判断と輸液による補正のリスク（有害事象とその対策等）		講義	3.5	5.5
				演習	1.5	
				試験	0.5	
				実習	5症例	
担当指導者						
学習目標	栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎を理解し、特定行為を適切に行うための知識・技術を身につける	栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識 解剖と病態生理	栄養及び水分管理に関わる薬剤投与の知識・技術の基礎を身につける 循環動態に関する解剖と病態生理の知識・技術の基礎を身につける 栄養及び水分管理に関わる薬剤投与の知識・技術の基礎を身につける 輸液療法の知識・技術の基礎を身につける			
		栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識 輸液療法				
		特定行為： 脱水症状に対する輸液による補正	多様な臨床場面において、脱水症状に対する輸液による補正を行うための知識・技術の基礎を身につける			
研修方法	栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識 解剖と病態生理	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）			
	栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識 輸液療法					
	特定行為： 脱水症状に対する輸液による補正	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）			
		講義（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	手順書の検討 1) 個人学習 2) 集合学習			場所：太田西ノ内病院
		演習（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	事例検討 1) 個人学習 2) 集合学習			場所：太田西ノ内病院
実習		患者に対する実技 5 症例 手順書の再評価			場所：太田西ノ内病院	
評価方法	講義（放送授業）：各単元ごとにE-ラーニング上で事後テストを行い、理解度を確認する 講義（面接授業）：講義中の観察評価、レポートの内容評価を行う 演習（面接授業）：グループディスカッションの観察評価、レポートの内容評価を行う 講義・演習により、すべての学ぶべき事項を学習した後、科目最終試験（筆記試験）を行い、科目全体の理解度を確認する 実習：レポート提出、評価表を用いた観察評価					

通番	学ぶべき 事項	単元	学習内容	方法	時間数
1	1, 2, 3, 5	栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識 解剖と病態生理	循環器系の構造・機能 循環器系の症候 血管の構造と血圧調節機構 脱水・低栄養状態の主要徴候 低ナトリウム血症・高ナトリウム血症の病態と補正 低カリウム血症・高カリウム血症の病態と補正 酸塩基平衡	講義 (放送授業)	2.5
2	4, 5, 6, 7	栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識 輸液療法	輸液療法の目的と投与経路 輸液の基本事項 輸液の分類 水分補給液、電解質輸液、補正用電解質液、アルカリ化剤、特殊輸液の種類と選択 末梢静脈栄養法に使用する輸液製剤の種類 中心静脈栄養法に使用する輸液製剤の種類 脱水・輸液の方法	講義 (放送授業)	3
3	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9	特定行為： 脱水症状に対する輸液による補正	脱水の原因と分類 脱水症状に関するフィジカルアセスメント 脱水症状に関する検査 脱水症状に対する輸液の投与量と速度の決定方法 脱水症状に対する初期輸液療法の実際 脱水症状に対する輸液による補正の有害事象とその対策	講義 (放送授業)	2
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートを記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			事例検討 ・個人学習：提示されたの脱水症状に対する輸液による補正の事例について、ワークシートを記載し、指導者・受講者と共有する ・集合学習：グループディスカッションを行い、検討した内容や自身の課題とその課題の解決に向けて学習すべきことをワークシートに記載し、指導者に提出する	演習 (面接授業)	1.5
4	科目最終試験		共通して学ぶべき事項（30分） 栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識 解剖と病態生理 栄養及び水分管理に係る薬剤投与の基礎知識 輸液療法 特定行為ごとに学ぶべき事項（30分） 特定行為：脱水症状に対する輸液による補正	筆記試験 (対面または E-ラーニング上での 実施)	1
5	実習 脱水症状に対する輸液による補正		患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
備考					

区分別科目名	術後疼痛管理関連			時間数の総計 8.5		
特定行為区分に含まれる特定行為に共通して学ぶべき事項	術後疼痛管理の基礎知識	1. 硬膜外麻酔に関する局所解剖 2. 硬膜外麻酔を要する主要疾患の病態生理 3. 硬膜外麻酔を要する主要疾患のフィジカルアセスメント 4. 硬膜外麻酔の目的 5. 硬膜外麻酔の適応と禁忌 6. 硬膜外麻酔に伴うリスク（有害事象とその対策等）	講義	3.5	4	
			試験	0.5		
特定行為ごとに学ぶべき事項	特定行為： 硬膜外カテーテルによる鎮痛剤の投与及び投与量の調整	1. 硬膜外麻酔薬の選択と投与量 2. 硬膜外カテーテルによる鎮痛剤の投与及び投与量の調整の方法	講義	2.5	4.5	
			演習	1.5		
			試験	0.5		
			実習	5症例		
担当指導者						
学習目標	術後疼痛管理の基礎を理解し、特定行為を適切に行うための知識・技術を身につける	術後疼痛管理の基礎知識	術後疼痛管理の知識・技術の基礎を身につける 硬膜外麻酔管理の知識・技術の基礎を身につける			
		特定行為： 硬膜外カテーテルによる鎮痛剤の投与及び投与量の調整	多様な臨床場面において、硬膜外カテーテルによる鎮痛剤の投与及び投与量の調整を行うための知識・技術の基礎を身につける			
研修方法 研修場所	術後疼痛管理の基礎知識	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）			
		講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）			
	特定行為： 硬膜外カテーテルによる鎮痛剤の投与及び投与量の調整	講義（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	手順書の検討 1) 個人学習 2) 集合学習		場所：太田西ノ内病院	
		演習（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	事例検討 1) 個人学習 2) 集合学習		場所：太田西ノ内病院	
		実習	患者に対する実技 5 症例 手順書の再評価		場所：太田西ノ内病院	
評価方法	講義（放送授業）：単元ごとにE-ラーニング上で事後テストを行い、理解度を確認する 講義（面接授業）：講義中の観察評価、レポートの内容評価を行う 演習（面接授業）：グループディスカッションの観察評価、レポートの内容評価を行う 講義・演習により、すべての学ぶべき事項を学習した後、科目最終試験（筆記試験）を行い、科目全体の理解度を確認する 実習：レポート提出、評価表を用いた観察評価					

通番	学ぶべき 事項	単元	学習内容	方法	時間数
1	1, 2, 3, 4, 5, 6	術後疼痛管理の基礎知識	硬膜外麻酔の目的 硬膜外麻酔の適応と禁忌 硬膜外麻酔に関する解剖と生理 硬膜外麻酔に関するフィジカルアセスメント 硬膜外麻酔の穿刺方法 硬膜外麻酔の管理 硬膜外麻酔に伴う有害事象とその対策	講義 (放送授業)	3.5
2	1, 2	特定行為： 硬膜外カテーテルによる鎮痛剤の投与及び 投与量の調整	術後痛の評価 硬膜外麻酔における薬剤の特徴 硬膜外麻酔における薬剤選択と投与量 硬膜外カテーテルによる鎮痛薬の投与および投与量の調整方法	講義 (放送授業)	1
			手順書の検討 ・ 個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートを記載する ・ 集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受け、自身が手順書案を作成 する際に工夫したい点、修正したい点などをワークシートに記載し、指導者に提出する	講義 (面接授業)	1.5
			事例検討 ・ 個人学習：提示された硬膜外カテーテルによる鎮痛剤の投与及び投与量の調整の事例について、ワー クシートを記載し、指導者・受講者と共有する ・ 集合学習：グループディスカッションを行い、検討した内容や自身の課題とその課題の解決に向けて 学習すべきことをワークシートに記載し、指導者に提出する	演習 (面接授業)	1.5
3	科目最終試験		共通して学ぶべき事項（30分） 術後疼痛管理の基礎知識 特定行為ごとに学ぶべき事項（30分） 特定行為：硬膜外カテーテルによる鎮痛剤の投与及び投与量の調整	筆記試験 (対面または E-ラーニング上での 実施)	1
4	実習 硬膜外カテーテルによる鎮痛剤の投与及び投与量の調 整		患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
備考					

区分別科目名	循環動態に係る薬剤投与関連			時間数の総計 13		
特定行為区分に含まれる特定行為に共通して学ぶべき事項	循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 解剖と病態生理	1. 循環動態に関する局所解剖 2. 循環動態に関する主要症候 3. 循環動態の薬物療法を必要とする主要疾患の病態生理 4. 循環動態の薬物療法を必要とする主要疾患のフィジカルアセスメント 5. 輸液療法の目的と種類 6. 病態に応じた輸液療法の適応と禁忌 7. 輸液時に必要な検査 8. 輸液療法の計画		講義	7.5	8
	循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 循環動態のアセスメントと輸液療法の基本			試験	0.5	
特定行為ごとに学ぶべき事項	特定行為： 持続点滴中の糖質輸液又は電解質輸液の投与量の調整	1. 糖質輸液、電解質輸液の種類と臨床薬理 2. 各種糖質輸液、電解質輸液の適応と使用方法 3. 各種糖質輸液、電解質輸液の副作用 4. 病態に応じた糖質輸液、電解質輸液の調整の判断基準（ペーパーシミュレーションを含む） 5. 持続点滴中の糖質輸液、電解質輸液の投与量の調整のリスク（有害事象とその対策等）		講義	3	5
				演習	1.5	
				試験	0.5	
				実習	5症例	
担当指導者						
学習目標	循環動態に関する薬剤投与の基礎を理解し、特定行為を適切に行うための知識・技術を身につける	循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 解剖と病態生理	循環動態に関する薬剤投与の知識・技術の基礎を身につける 循環動態に関する解剖と病態生理の知識・技術の基礎を身につける 循環動態のアセスメントと輸液療法の基礎を身につける			
		循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 循環動態のアセスメントと輸液療法の基本				
		特定行為： 持続点滴中の降圧剤の投与量の調整	多様な臨床場面において、持続点滴中の降圧剤の投与量の調整を行うための知識・技術の基礎を身につける			
		特定行為： 持続点滴中の糖質輸液又は電解質輸液の投与量の調整	多様な臨床場面において、持続点滴中の糖質輸液又は電解質輸液の投与量の調整を行うための知識・技術の基礎を身につける			
研修方法 研修場所	循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 解剖と病態生理	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）			
	循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 循環動態のアセスメントと輸液療法の基本					
	特定行為： 持続点滴中の糖質輸液又は電解質輸液の投与量の調整	講義（放送授業）： Eラーニング	1) 事前テスト（10分） 2) 講義（PDF資料・動画） 3) 事後テスト（20分）			場所：太田西ノ内病院
		講義（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	手順書の検討 1) 個人学習 2) 集合学習			
		演習（面接授業）： 指導者・他の受講者と対面またはオンラインツール	事例検討 1) 個人学習 2) 集合学習			場所：太田西ノ内病院
		実習	患者に対する実技 5 症例 手順書の再評価			場所：太田西ノ内病院
評価方法	講義（放送授業）：単元ごとにE-ラーニング上で事後テストを行い、理解度を確認する 講義（面接授業）：講義中の観察評価、レポートの内容評価を行う 演習（面接授業）：グループディスカッションの観察評価、レポートの内容評価を行う 講義・演習により、すべての学ぶべき事項を学習した後、科目最終試験（筆記試験）を行い、科目全体の理解度を確認する 実習：レポート提出、評価表を用いた観察評価					

通番	学ぶべき 事項	単元	学習内容	方法	時間数
1	1, 2, 3, 4	循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 と病態生理	解剖 循環器系の構造・機能 循環器系の診察・検査・画像 循環器系の症候・疾患 循環器系の主要疾患の病態生理	講義 (放送授業)	4.5
2	1, 4, 5, 6, 7, 8	循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 循環動態のアセスメントと輸液療法の基本	循環器系のフィジカルアセスメント 輸液療法の目的と投与経路 輸液の基本事項と方法	講義 (放送授業)	3
3	1, 2, 3, 4, 5	特定行為： 持続点滴中の糖質輸液又は電解質輸液の投 与量の調整	水分補給液と電解質輸液の種類と選択 輸液の投与量と速度の決定方法 糖質輸液、電解質輸液の適応と使用方法 糖質輸液、電解質輸液の投与量の調整	講義 (放送授業)	1.5
			手順書の検討 ・個人学習：各受講者が自施設の手順書の内容を確認し、ワークシートを記載する ・集合学習：指導者より手順書作成の要点・見直し方法についての説明を受ける	講義 (面接授業)	1.5
			事例検討 ・個人学習：提示された持続点滴中の糖質輸液又は電解質輸液の投与量の調整の事例について、ワーク シートを記載し、指導者・受講者と共有する ・集合学習：グループディスカッションを行い、検討した内容や自身の課題とその課題の解決に向けて 学習すべきことをワークシートに記載し、指導者に提出する	演習 (面接授業)	1.5
4	科目最終試験		共通して学ぶべき事項（30分） 循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 解剖と病態生理 循環動態に係る薬剤投与の基礎知識 循環動態のアセスメントと輸液療法の基本 特定行為ごとに学ぶべき事項（30分） 特定行為：持続点滴中の糖質輸液又は電解質輸液の投与量の調整	筆記試験 (対面または E-ラーニング上での 実施)	1
5	実習 持続点滴中の糖質輸液又は電解質輸液の投与量の調整		患者に対する実技／経験は難易度に応じて5症例とする 手順書の再評価／5症例実施後に作成した手順書を再評価する	実習	
備考					